

滋賀女短大 ○奥村 董

京都女大家政 福井 弥生 畠山 絹江

〔目的〕乳幼児服は、成長・発達の最も著しい時期に着用する衣服であり、しかも自ら選んで着用できないことを考えると、衣服サイズの選び方は大切である。本研究は、乳幼児の体格と着用している衣服サイズの実態を検討し、よりよい衣服設計への一助とすることを目的とした。

〔方法〕資料は1990年被服構成学部会の行った「乳幼児衣料のアンケート調査」の原票である。対象は、0～24カ月の乳幼児をもつ保護者1019名である。乳幼児の月令を6カ月ごとに4区分とし、J I S (L4001-1983)と同様に身体寸法(身長)の体格区分を設定した。そして体格と着用している衣服のサイズおよび着用期間などをクロス集計した。服種は上・下半身用肌着、上・下衣服、つなぎ服、ねまき等6グループに分けた中からとりあげた。また1992年11月保母の立場からみた乳幼児衣料についてアンケートを行った。

〔結果〕①適応サイズの着用率は低く、肌着と上着ではサイズの選び方が異なり、上着では大きめを着用する傾向がみられる。②衣服の着用期間は、0～6カ月までは短いが月令が進むにしたがって長くなる傾向が見られる。③購入時のサイズの選び方については「1サイズ大きいもの」を選ぶ割合が最も多く、ついで「適合サイズ」「2サイズ大きいもの」であった。④保母へのアンケート調査結果では、サイズ表示についての認識度は高い。サイズの適合性については、上にはおる衣服では「大きめ」、肌着・ドレス・ねまき類は「ちょうどよい」と観察している回答が多く、いずれも50%以上みられる。着脱させにくい部位は「首ぐりが小さい」が約80%で圧倒的に多い。